

## 中国語学習目的の変化に関する調査研究

保 坂 律 子\*

### Study on the changing of purposes for learning Chinese language

Ritsuko HOSAKA\*

#### 1. はじめに

筆者は本学に平成10年度に着任、本学での教育歴もすでに20年余りとなった。着任当時より第2外国語科目<sup>(1)</sup>の中では中国語選択者が最も多い状態が続いている。中国語学習者の増加は1970年代後半に始まった中国の改革開放政策による中国市場の開放や、アジア諸国の経済的躍進により人々の関心がアジアに向かい始めたことに端を発するが、中国語はもはや第二外国語のなかで一定の地位を得たといえる。本学ではコロナ禍のため遠隔授業となった令和2年度には、履修登録を締め切ると1クラス90名を超える授業もあり急遽クラスを増設する事態となった。そのような経緯から令和3年度はクラスの適正人数を保つため、第2外国語科目は履修登録時に抽選により人数制限を行っている。<sup>(2)</sup>

日中を取り巻く社会環境はこの20年間も大きく変わり、来日中国人留学生数は令和に入りコロナ禍の影響でやや減少がみられこそするが、平成11年から平成30年の20年間で約4.5倍に増えている<sup>(3)</sup>。留学生以外でも来日中国観光客、訪日中国人は増加を続けており、私たちの身近に中国人がいる環境が当たり前であることを誰もが実感しているだろう。

本稿は、本学において中国語履修学生を対象

に平成15年（以下 H15年と記す）に実施したアンケートの調査結果と令和3年（以下 R3年と記す）7月に実施したアンケート調査結果を比較考察し、学生の履修目的、意欲や取り組み姿勢等の経年変化を分析することにより中国語教育の現状を明らかにし、環境や時代の変化に合った効果的な教育方法を考える資とするものである。

#### 2. 令和3年度アンケート調査概要

昨年度に続き、本年 R3年度前期は新型コロナウイルス感染症拡大のため第2外国語科目は遠隔授業（オンライン授業）となった。そのため本学で前期後期終了時に全科目対象に実施されている「授業アンケート」はウェブ上で行われた。筆者の令和3年度「中国語学習に関するアンケート」は別途 Google forms で作成、URL を掲示し任意に回答してもらう形式で実施した<sup>(4)</sup>。概要は下記の通りである。

##### 2.1 調査時期および調査対象

時期：令和3年7月

調査対象：駒沢女子大学 第2外国語<sup>(5)</sup>中国語履修学生

有効回答数：66名（中国語Ⅰ（主に1年生）・Ⅲ（主に2年生）履修者97名中）

\*人間総合学群 心理学類

## 2.2 調査項目と調査意図

調査項目は以下に述べる観点から全8項目を設定した。

### Q1 中国語選択理由（一番近いもの1つ）

アンケート調査の主たる目的である。選択理由から中国語の学習目的、学習動機がどこにあるのか把握し、同時に学習意欲も探れるであろうことを期待する。

### Q2 単位が取得しやすいか考慮したか

Q1の関連項目である。第2外国語が必修科目である場合には、単位の取得しやすい語学を選択する学生が一定数いることは否めない。H15年の調査対象学生は4か国語から1外国語を必修科目として履修していたが、R3年は全学生が選択科目としての履修である。目的と意欲のより正確な把握のため、選択科目でも単位取得が主目的となりうるのかどうか、また単位を離れた学習意欲の有無の分析のため、前回と同様に調査項目とした。

### Q3 中国語の目標レベル

目標とする外国語のレベルは、学習目的、意欲と相関が高いと判断してよい。一般に高いレベルを目標とするにはそれなりの意欲を必要とするからである。本項目は学習目的と意欲を探るものである。

### Q4 教科書以外の教材利用（複数回答可）

学生が学習に際し、教科書以外に辞書や参考書などを使用、利用することは、金銭的にも時間的にも中国語学習に投資することにはかならない。これは学習意欲、学習目的と相関がある。ここでは利用の実態を把握し、同時に教育効果を高める使用、利用方法について検討する参考とする。なお、H15年とR3年の調査には18年の隔たりがあり、その間にインターネット環境等が大きく変化しているが基本的に選択肢は同じとし、「その他」は具体的に挙げてもらった。

### Q5 英語との学習比

一般に学習意欲を数値化し、客観的に示すことは難しい。仮に学習時間を調査し、1時間が2時間に増えても意欲が2倍になったとは言えない。そこで学習意欲を相対的に把握するため、ほぼ全員が学習している英語を比較の対象とし、英語との学習比を問うことで中国語への力の入れ方、意欲を探る尺度とした。

### Q6 希望する副教材

教科書以外で希望する副教材を調査することは、学生の興味存在と学習指向の把握に必要である。それらを踏まえて教育方法を考えることは学習意欲を喚起し、教育効果を高めることに有用である。

### Q7 学習開始後の印象（複数回答可）

学習開始後の中国語の印象を調査することは学生が学習以前に持っていた中国語に対する学生の期待、予想がどのようなものであったかを知ることにつながる。またその期待と予想とのギャップを把握することは教育効果を高める指導法の改善につながることが見込まれる。

### Q8 今後の学習継続予定（学習継続予定）

今後の学習継続予定を把握することで、学習目的、学習意欲とこれまでの教育効果を知ることができる。

以上8項目の調査意図をまとめたものが表1である。

表1 調査項目と調査意図

調査項目	調査意図	学習目的	学習意欲	教育効果	指向
Q1 中国語選択理由		○	○		
Q2 単位取得の難易		○	○		
Q3 目標レベル		○	○		
Q4 教科書以外に使用しているもの		○	○	○	
Q5 英語との学習比			○		
Q6 希望する副教材				○	○
Q7 学習開始後の中国語の印象				○	
Q8 学習継続予定			○	○	○

## 2.3 先行調査

筆者は過去に R3年と同様の調査を実施している。その概要は下記のとおり。

調査時期：平成15年（2003年）7月

調査対象：駒沢女子大学 第2外国語中国語（選択必修）履修生

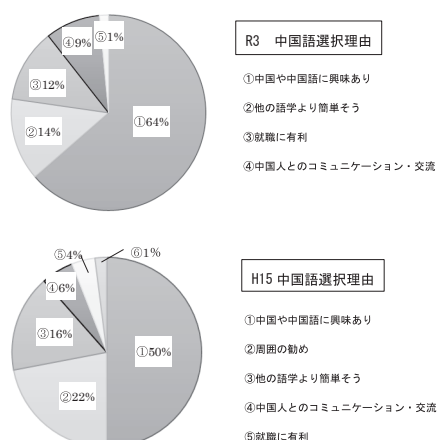
有効回答数 計200名（1年126名、2年74名）

調査項目：8項目

## 3. 調査結果の分析と考察

本章では令和3年（以下 R3年と表記）の調査結果と平成15年（以下 H15年と表記）の先行調査結果と比較し、分析と考察を行う。

### Q1 中国語選択理由



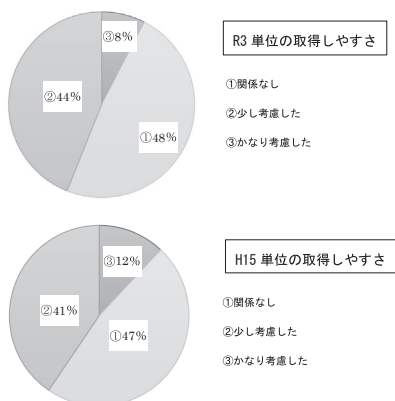
H15年と R3年の調査では有効回答数が異なる。そのため調査項目の形式が選択肢中から回答を1つ選ぶものは、以下比較対照のため回答者数ではなくパーセンテージを用いた円グラフで示す。

R3年の調査で Q1中国語選択理由として最も多かったのは H15年と同様「中国や中国語に興味あり」である。その回答者の割合は H15年の50%から R3年では64%へと大幅に増加している。「中国人とコミュニケーションや交流」の9%を加えると、回答者の74%が、中国・中国語、あるいは中国人とのコミュニケーションに

興味や関心から中国語を選択していることがわかる。また「他の語学より簡単そう」は H15年には16%で第3位、R3年には14%で第2位とほぼ変化がない。「就職に有利」は H15年には4.2%であったが、R3年には12%と増加している。

R3年の調査で特に目を引くのは、「周囲の勧め」がゼロであることである。すなわち学生自身の意思で中国語を選択していることが明確である。H15年では「周囲の勧め」が回答者の22%を占め、選択理由の第2位であった。具体的には親からの「これからきっと役にたつ」勧めが多かった。

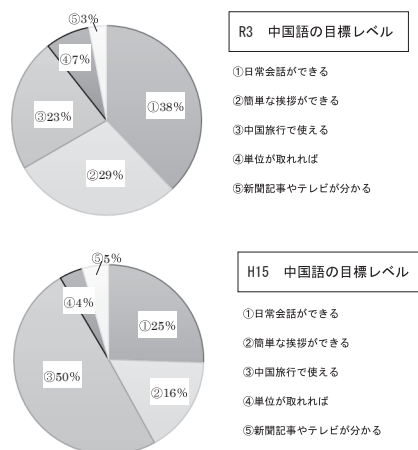
### Q2 単位の取得しやすさ



R3年、H15年の調査でも単位の取得しやすさは「関係なし」が約半数を占め、「少し考慮した」の割合もほぼ同じである。R3年の調査では単位の取得しやすさを「かなり考慮した」は8%、H15年の調査では12%であった。H15年のほうが「かなり考慮した」割合が4%多いが、H15年調査時は選択必修科目であったという要素を加味するとこの差は有意ではないと考えられるため R3年、H15年はともに「単位の取得しやすさ」は中国語選択の決め手ではないと言える。中国語選択に前向きな姿勢は Q1の選択理由からもうかがえる。なお、H7年に筆者が行った「首都圏8大学第2外国語履修学生に行ったアンケート」<sup>(6)</sup>では、単位の取得しやすさを「か

なり考慮した」が2割以上いた。

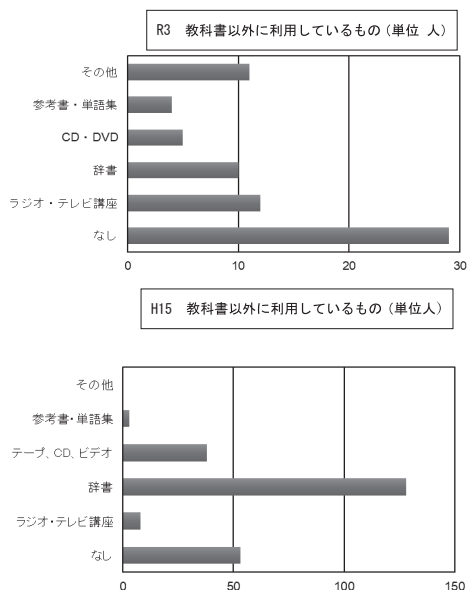
### Q3 中国語の目標レベル



本項目の回答で特筆すべき点をあげると、H15年の調査で目標レベル第1位の回答者の50%を占めた「中国旅行で使える」がR3年は23%と半減し、目標レベルの第3位に順位を下げたことである。その理由として18年前のH15年当時、中国語の使用場面としてまず「中国旅行」が想起されたからだろう。近年のように日本国内で私たちの身近に中国人が多くいる、あるいは来日中国人が増加している環境では中国へ行かずとも中国語使用場面がある。したがって「中国旅行で使える」の回答者数の比較は有意であるとは言えない。一方R3年の目標レベル第1位は「日常会話ができる」で38%、第2位は「簡単な挨拶ができる」で29%であり、それぞれH15年より13%ずつ増加している。R3年では中国語の使用場面をまず日本国内で設定している学生が多いと思われ、回答に反映されたと考えられる。またH15年には4%だった「単位が取れば」はR3年には7%と微増している。「新聞記事やテレビが分かる」はH15年の5%からR3年は3%に減っている。本アンケートでは比較検討のために質問項目にはH15年、R3年に基本的に同一選択肢を用いているが、

インターネット環境が格段に整った現在、ネット上でデジタル版新聞や動画ニュースを視聴する学生がいた場合、選択肢「新聞やテレビが分かる」は選択しないであろう。したがってここで「新聞記事やテレビが分かる」の回答数の比較は有意ではない。

### Q4 教科書以外に利用しているもの



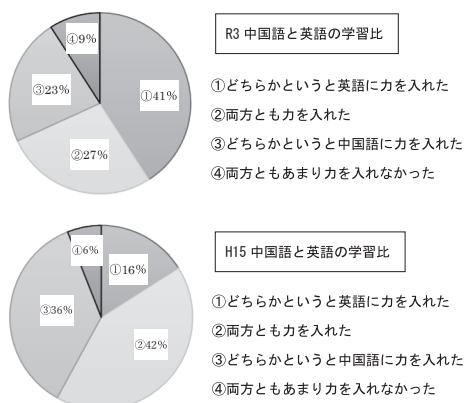
本項目ではH15年調査時の選択肢「テープ、CD、ビデオ」をR3年では「CD、DVD」に変更した。H15年は教科書の音声資料として「テープ、CD、ビデオ」を選択肢として用意したが、現在の教科書には教科書の音声資料としてはCDが標準で付属されており、もはやテープはない。H15年にはCD付属の教科書は徐々に普及し始めていたが、音声資料として教科書準拠のテープもまだ多かった。また、映像資料としては現在DVDのみでビデオはない（更に言えば、再生に必要なビデオデッキも製造されていない）。H15年に教科書以外に利用しているものとして最も多かった「辞書」は、R3年では「なし」を除くと僅差で「ラジオ・テレビ講座」「その他」に続く第3位に順位を落としている。

一方H15年には200名中「ゼロ」であった「そ

の他」がR3年には第2位であること、またR3年には「なし」が「ラジオ・テレビ講座」の倍以上で最も多い理由について考えてみたい。「教科書以外に利用しているもの」として「辞書」を選んでいなくとも、実際はWeb上のオンライン辞書を利用している学生がいる。筆者も授業内でオンライン辞書を紹介しており一定数の学生の利用があることを把握している。かつオンライン辞書を利用している学生は「その他」あるいは「なし」を選択しており、回答者毎に違う選択肢を選んでいくことになる。さらに「なし」「その他」と回答した中にはYouTubeをはじめWeb上のさまざまなコンテンツを利用している学生が存在し、R3年の「その他」にはH15年では「ラジオ・テレビ講座」、CD、DVDなどに相当する内容が含まれる可能性が高い。すなわちR3年では実際に利用しているものの内容が、回答では分散しているのである。したがって本項目で比較として有意なのは冊子「辞書」の利用のみである。

今後「教科書以外に利用しているもの」というアンケート項目を設ける場合、正確なデータ収集には現在の学習環境に応じた選択肢を用意することが必要となる。

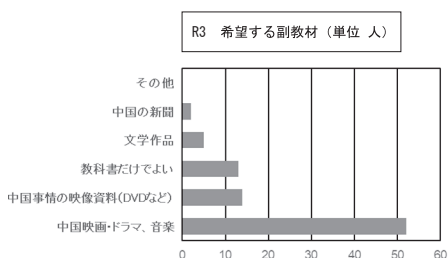
#### Q5 中国語と英語との学習比



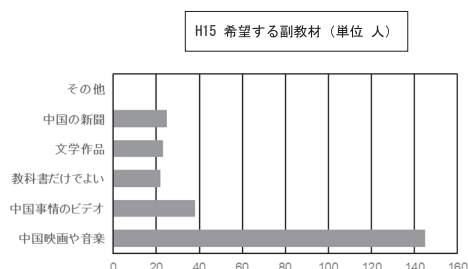
本項目の調査結果にはR3年とH15年では有

意な違いが見られる。R3年の調査では「中国語・英語とも力をいれた」は27%、「中国語に力をいれた」の23%を合わせると中国語に力をいれて取り組んでいる学生は全体の5割である。また「英語に力をいれた」の41%に「中国語・英語とも力をいれた」27%を加えると、英語に力をいれて取り組んでいる学生は全体の3分の2に達している。一方、H15年では英・中の学習比では「中国語・英語とも力をいれた」が42%で最も多く、「中国語に力をいれた」の36%を合わせると、中国語に力をいれ取り組んだ学生は全体の4分の3を超えていた。この結果からは本学学生は外国語学習に力をいれ取り組んでいるが、現在は中国語より英語学習に力をいれている学生が多いようである。ただしH15年は選択必修科目での履修学生、R3年は選択科目での履修学生であり、必修科目か選択科目かの違いが結果に影響を与えている可能性もある。必修科目では単位を落とすと翌年に再履修しなければならないからだ。なお、H15年に先立つH7年に本学を含む首都圏8大学の第二外国語履修学生に行ったアンケート調査保坂律子1997<sup>(6)</sup>では「両方とも力を入れなかった」学生は20%にも達していたことと比べても、本学学生は総じて語学学習に前向きであることが見て取れる。

#### Q6 希望する副教材（複数回答可）

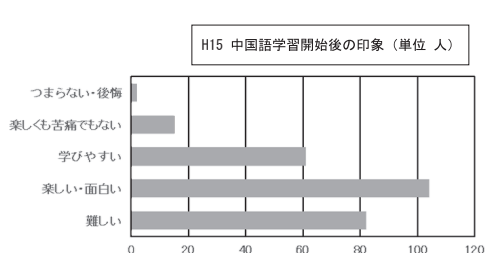
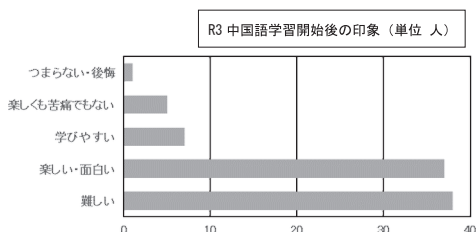






R3年の調査では各調査項目とも比較のため選択肢は基本的に H15年と同じにしている。しかし Q4でもふれたように H15年の選択肢中の「中国事情のビデオ」および再生用デッキは販売終了のため、後継の選択肢として「中国事情の映像資料」(DVD)に変更した。R3年と H15年との回答で大きく異なるのは副教材として「中国の新聞」や「文学作品」を希望する学生が激減したことである。その一方で R3年は「中国映画・ドラマ・音楽」などの視聴覚資料を希望する学生の比率が高まっている。R3年の調査では H15年で選択肢「中国映画や音楽」としていたものに「ドラマ」を加えた。これは H15年にはテレビ放映のなかった中国ドラマが現在では視聴可能になっているからである。先の Q4からも見て取れるように、学生は全体として紙媒体の教材ではなく視聴覚資料の副教材を希望していることが分かる。ただ「中国の新聞」や「文学作品」については回答として選択していなくても、紙媒体ではないウェブ上の「中国の新聞」や「文学作品」の利用を希望している可能性はある。

#### Q7 中国語学習開始後の印象 (複数回答可)

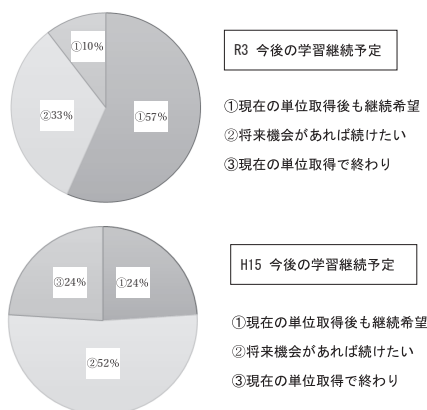


R3年の調査では学習開始後の印象を半数以上56%の37名が「面白い・楽しい」と回答、同時にほぼ同数57%の38名が「難しい」と回答している。「学びやすい」と答えたのは7名で全体の1割強である。この結果から半数以上の履修者が中国語を始めてみると「楽しい・面白い」けれど、予想より「難しい」と感じていることが見て取れる。初級中国語の学習では、漢字(簡体字)を見れば意味が理解できることが多いため、「漢字だから簡単だろう」「易しい」だろうとの予想を持ち選択する学生が多い。しかし目で見ると馴染みのある漢字でも音となると全く異なり、学習開始直後に学ぶ中国語の母音、子音、声調などの発音は日本語と異なり種類も多く難しく、さらにピンインと呼ばれる中国語の発音表記を覚えねばならず、予想に反して「難しい」と感じる時期がしばらく続くためだろう。

しかしその期間を過ぎて漢字を見てわかるだけでなく、徐々に音を聞いて中国語の単語が理解できるようになるとペアで簡単な挨拶ができるようになり、「楽しい」と感じる気持ちが湧いてくるようである。一方 H15年の調査でも52%が「楽しい・面白い」と答えており、R3年度より僅かに少ないがほぼ同じ割合である。また H15年度は「学びやすい」は全体の3割、「難しい」は全体の4割強であった。H15年が R3年に比べ「学びやすい」が多かった理由は授業形態の違いによることが考えられる。R3年はコロナ禍のため遠隔授業(オンライン同時双方向)となり、授業も音声資料を利用し

対面授業に比べ「聞く」、「話す」内容が多くなっているからである。通常の教室授業ではオンライン授業と比べ、黒板を使って中国語を「書く」ことが多く視覚的「学びやすい」の選択に繋がっている可能性がある。

#### Q8 今後の学習継続予定



R3年の調査では、今後の中国語学習予定を「単位取得で終わり」とした学生はわずか10%、H15年の調査では24%であった。学習継続について R3年は「現在の単位取得後も継続したい」が57%、途中で間があいても「将来機会があれば続けたい」が33%であった。「将来機会があれば続けたい」は履修の関係から在学中に連続して履修できずに学習の間が開いてしまっても続けたい（実際に1年次に履修後、3年次、4年次になって履修する学生も一定数いる）というケースと、卒業後また学ぶ機会があれば学習したいという2つのケースが含まれる。今回の調査結果からは R3年の回答者のうち90%が「中国語の学びを続けたい、学習は嫌ではない、チャンスがあれば学びたい」という意思を持つ学生であることがわかる。一方 H15年でも「将来機会があれば継続したい」は52%と半数以上であった。R3年の回答者は1年生が多いのに対し、H15年の回答者は必修2年目として学ぶ2年生が多く含まれていたことを考慮すると H15年の

「現在の単位取得で終わり」の24%は納得できる数値ではある。「現在の単位取得後も継続したい」「将来機会があれば続けたい」学生が多いことは、現在の授業が「学ぶ意欲を持ち続けさせる」一定的教育効果があると考えられ、また通信環境の変化や中国人と接する機会の増加等の要因が、学習意欲やモチベーションの維持に役立っていると考えらる。

#### 4. 先行調査研究との比較からみた学習目的・意欲、意識の変化

H15年に授業内で行った調査回答者が200名だったのに対し、R3年のウェブ上での調査は調査対象97名のうち回答者66名であった。数の上では約3分の1であるため、2回の調査を同条件で比較することはできない。しかし調査結果の比較分析からは、以下のような中国語履修学生の学習目的、意欲および意識の変化傾向を指摘することができるであろう。

第1に Q1～Q3の結果が示すように、学生は明確な学習目的をもって中国語を選択し、履修にあたっては具体的な中国語の目標レベルを持っている。同時に学生の中国に対する関心は H15年以降も R3年にかけて高まりを見せていることが分かる。中国語選択理由では「中国や中国語に興味あり」が H15年の50%からさらに増え64%に、「中国人とのコミュニケーションや交流」との回答を合わせると積極的理由が全体の4分の3を占める。さらに「就職に有利」の12%を加えると85%が前向きな理由から中国語を選択していることが分かる。特に顕著なのは H15年では選択理由の第2位だった「周囲の勧め」が R3年にはゼロとなっていることである。合わせて単位の取得しやすさを考慮する学生の減少は有意な変化であり、学生自身が明確な目標を持ち、自分自身の意思で中国語を選択していることが明らかになった。

第2にQ3の結果が示すように、学生は目標とするレベルをH15年のトップだった「中国旅行で使える」から「日常会話ができる」「簡単な挨拶ができる」のように中国人とのコミュニケーション場面での使用を目標とする方向に変化している点である。これは中国語の使用場面が日本において急激に増加していること、すなわち私たちの周りに中国語使用環境が拡大していることと大いに関係がある。中国語を学べば身近な場所で実際に使ってコミュニケーションできる。そのため「日常会話」や「簡単な挨拶」の内容についても、場面設定は日本でアルバイト先やキャンパス内、観光地での中国人との会話を想定しているようだ。もちろん具体的に中国旅行で訪れたい場所があり、その地で交流してみたいという学生もいる。

第3にQ5の結果から本学学生の語学学習に対する意欲は高く維持されていることが分かった。ただしH15年では中国語に力を入れた学生は全体の4分の3以上であり、R3年では5割であった。とはいえH15年では英語、中国語ともに力を入れなかった学生は6%、R3年では9%にとどまり、どちらかの語学に前向きに取り組んでいる学生は9割を超えていることが見て取れる。またQ8から在学中は英語に力を入れる学生がやや多い傾向にあるが、多くの学生が中国語の学習継続に意欲的であることも明らかになった。

第4にQ4、Q6の回答からインターネット環境の急速な進歩につれて、学生はH15年当時とは異なり中国事情や中国関連情報に容易にアクセスできるようになり興味や関心の対象が広がっていることが明らかになった。

## 5. 学習効果を高める教育方法

以上の調査分析をふまえ、第2外国語中国語教育として学習効果を高める教育方法を考えて

みたい。まず中国語選択理由トップの「中国や中国語に興味あり」が全体の3分の2を占めること、それに「就職に有利」「中国人とのコミュニケーションや交流」を加えると約85%となることから、学習内容は教養教育としての文法や作文、講読などのいわゆる読み書きを中心としたものは適切ではないであろう。

学生は、自分の興味や関心のある情報を得るために中国を知りたい、中国語を学びたいという気持ちから中国語を学んでいることは明らかである。中国語を学びチャンスがあれば留学生とキャンパスやアルバイト先で話してみたい、中国ドラマやC-popを楽しみたい、中国旅行に行ったら現地の人と交流したい、このような学生の潜在的要求に応え、さらに本学教養教育科目（技法知）<sup>(7)</sup>としての期待にも沿う中国語の力は、自ら情報を収集し発信できるコミュニケーション能力である。そのため基本文法はしっかり押さえながらも、教材は中国旅行や中国留学の場面設定としたものばかりではなく、場面設定を日本とした教材、日本事情そしてポップカルチャーなど、学生が中国人に積極的に発信できるような情報も取り入れることが望ましいのではないかと。同時にコミュニケーション能力を高めるために中国語を聞き、話す比重を多くしアクティブラーニングを取り入れることも大切であろう。

ところで中国人をはじめ外国人が日本や日本語に興味を持つきっかけは、日本のアニメだったという話はよく聞く。あまり知られていないが実は外務省のホームページには外交政策中に「ポップカルチャー外交」<sup>(8)</sup>が紹介されている。そこには「外務省では、我が国に対するより一層の理解や信頼を図るため、従来から取り上げている伝統文化・芸術に加え、近年世界的に若者の間で人気の高いアニメ・マンガ等のいわゆるポップカルチャーも文化外交の主要なツール



として活用しています」とある。つまりポップカルチャーは「外務省のお墨付」なのである。日本人学生が中国や中国語に興味を持つきっかけにもまた同じような現象が見られる。今回Q1でも「中国のアニメ作品にハマったのがきっかけ」で中国語を選択したという学生がいた。「映画は日本語吹替え版が上映されたがwebアニメや漫画は中国語なので内容を知りたくて中国語を選択した」のだという。またQ4の教科書以外に利用しているものとして「YouTube動画」「中国語映画」「C-pop」などや「好きなアーティストに中国出身のメンバーがいるので、そのメンバーのラジオや動画をよく見て勉強している」という具体的回答もあった。さらに今回「その他Q9（中国語学習の動機、中国への興味、関心などなんでも）」というH15年には設けなかった自由記述欄を設けたところ「中国の芸能人を好きになったのと、中国からの留学生と友達になったのがきっかけでこの授業をとりました。中国の文化にも興味があるのでこの前のアニメ<sup>(9)</sup>のような文化を知る機会があったのはとっても面白かったです」などの回答もあった。また授業で提出される出席票には筆者の知らないアイドルやドラマなどの素晴らしさ（と視聴の勧め）などが縷々記されていることもあった。このような現状をふまえ、学生の学習意欲をより喚起するために時には日中のポップカルチャーも副教材として利用し、中国語教育・学習にうまく繋げていくことも有効ではないかと感じている。

選択科目としての第2外国語科目である以上、本学では通常2年間程度で中国語の学習は終わる。しかしインターネット環境が格段に整い、学生もこの環境に十分慣れてきている。もちろんネット上には中国語の文法解説や発音、会話練習の動画など確かに役立つ情報もあるが、また同時に根拠のない情報や信頼できない語学動

画なども少なくない。教員はインターネット上の情報を精査し利用するにあたっての注意事項を学生に周知した上で、適切な利用を促せば、授業を離れても学生の中国語のモチベーションを保ち、学習の継続を促すことも可能ではないだろうか。もちろん従来どおりの辞書や参考書、書籍や新聞などを利用しての学習方法、情報検索方法の紹介は忘れてはならない。

## 6. 結び

本稿では令和3年7月に実施した本学中国語履修学生へのアンケート調査を通じて、中国語の選択理由、学習目的や意欲等を明らかにし、平成15年に実施し同様の調査との比較分析を行った。その結果に基づき、中国語履修学生の学習目的・意欲、意識の変化等の考察を行い、今後の学習効果を高める教育方法について提案を行った。本稿は限られた人数の学生を対象にしたものであるが、研究を意義あるものとしより効果的な教育方法を考えるには調査対象数を広げ、インターネット環境の変化に即したアンケート項目とその選択肢の設定などが必要であろう。また教員側の意識、社会が期待する第2外国語像などの調査も望まれる。今後の課題である。

### 〔注〕

- (1) ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語の4か国語
- (2) 第2外国語は抽選により1クラス30名の人数制限を設けた。  
ただし本年度はいずれの語学も制限人数を超える登録はなかった。
- (3) 独立行政法人日本学生支援機構 2020年度学個人留学生在在籍状況調査結果 <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2020.html> に基づき算出。

- (4) R3年アンケート調査実施には本学非常勤講師 西端彩先生にもご協力いただいた。
- (5) 正確には教養教育科目（技法知）科目である。
- (6) 「首都圏8大学第二外国語履修学生を対象に行ったアンケート」  
調査期間：平成7年11月～12月  
対象：首都圏8大学、第二外国語履修学生  
有効回答数：411名  
＊この結果は保坂律子1997に詳しい。
- (7) 本学での第2外国語の位置づけ。
- (8) 外務省ホームページ 広報文化外交＞文化の交流＞ポップカルチャー外交 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/koryu/pop/index.html>
- (9) 授業内で紹介した。『宝蓮灯』（ほうれんとう）は中国の古代から伝わる有名な神話伝説『宝蓮灯』を題材に中国建国50周年を記念して制作された長編アニメーション映画で、1999年1月1日公開上映された。日本では劇場未公開。中国の有名俳優が声の出演をしている。  
<https://www.youtube.com/watch?v=D2Dw-2ntHJo&t=4s>

#### [参考文献]

- ・保坂律子1997「履修目的から考える中国語教育研究」—アンケート調査にみる履修の現状と教育方法の課題—『お茶の水女子大学人間文化研究科年報』第二十号、pp76-86
- ・保坂律子1998〈日本大学生汉语学习情况调查〉《世界汉语教学》第2期（中国・北京）pp106-110
- ・保坂律子2003「中国語学習目的・意欲の変化に関する調査研究」『駒沢女子大学「研究紀要」第10号』pp257-268